

生徒の学習状況を把握し、 自走力と思考力を育む指導を追求

福岡県・私立九州国際大学付属高校

ICTを活用して収集した学力アセスメントを始めとする生徒の情報・データを基に、日々の声かけや授業の改善を図っている福岡県・私立九州国際大学付属高校。学校教育目標の実現にもつながるその実践を紹介する。

取り組みの背景

自走力の向上を図り、 授業改善の実現を目指す

福岡県・私立九州国際大学付属高校は、学校のブランドデザインに掲げた「時代が求める新しい力の習得」のための授業改善の実現を目指し、学力アセスメントの結果や課題の取り組み状況といった情報・データを用いて、生徒たちの自走力の育成に力を注いでいる。ICT教育改革プロジェクト(以下、ICTEP)のメンバーの桑野健太郎先生は、次のように説明する。

「アメリカの教育心理学者であるベンジャミン・ブルームによる教育目標の分類改訂版(*1)を基に、授業を構想しました。それは、家庭学習を始めとする授業外学習で、事後的知識に働きかける(記憶・理解する)活動を行い、授業内学習では、概念的知識に働きかける(応用・分析する)活動を行うというものです。生徒たちには、『授業では思考力・判断力・表現力を育成する活動を行うので、知識・技能は授業外で身につけてほしい』と明確に伝えています」

授業外学習は、個別最適な学びを

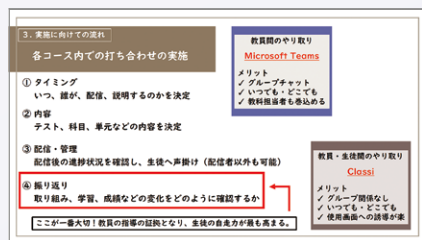
実現しようと、「Classi(*2)」内の「学習トレーニング」を活用している。「学習トレーニング」には、教師が課題を指定して配信する「単元定着トレーニング」と、生徒が目標に向かって自主的に学ぶ「生徒自主学习機能」があるが、桑野先生はその2つの機能を使い分け、得られるログを分析・活用して生徒が授業外学習において自走できるよう支援した。

さらに、ICTEPリーダーである三好規夫先生は、Microsoft Formsを活用して得られるデータを基に、生徒の課題を明確化し、思考力・判断力・表現力の育成を重視した授業を行っている。次ページからは桑野先生、三好先生の実践を紹介する。

情報・データの利活用のための校内研修

ICTを活用した問題の解決と 効果検証の方法を共有

三好先生がリーダーを務めるICTEPは、校内のICT活用を推進するための研修などを行う部署だ。「ICTEPが重視するのは、『〇〇を可視化したい』『〇〇を効率化したい』などと、解決したい問題を明確にしてから、どんな技術が活用できるか、そして効果が表れたことをどのように検証するかを考えることです」と、三好先生は説明する。ClassiなどのICTツールについても、ICTEPが校内研修を開催し、ノウハウを共有している(下写真)。ICTEPでは、校内のICT活用に関するアンケート調査を毎学期行っており、そこで把握した現場の課題に応じて、校内研修の内容を決めている。



* 学校資料をそのまま掲載。

学校概要

設立 1958(昭和33)年
形態 全日制/普通科/共学
生徒数 1学年約540人

2022年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、お茶の水女子大、東京外国語大、東京工業大、名古屋大、大阪大、広島大、九州大などに188人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、国際基督教大、東京理科大学、法政大、明治大、早稲田大、九州国際大などに延べ1000人が合格。



ICT教育改革プロジェクトメンバー
桑野健太郎
同校に赴任して21年目。英語科、
くわの・けんたろう



ICT教育改革プロジェクトリーダー
三好規夫
みよし・のりお
同校に赴任して5年目。国語科

* 1 ブルームが提唱した、教育の目標を分類するための枠組みをアンダーソンらが改訂したもの。認知過程次元(記憶・理解・応用・分析・評価・創造)と知識次元(事後的・概念的・手続的・メタ認知的)から成る。
* 2 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

配信した課題への 取り組み状況を 分析して 生徒の自走力 を育む

自主学習への取り組み方と 模擬試験の結果との相関を示す

1年次には、自走力を可視化・育成するため、桑野先生は、Classiの「学習トレーニング」の生徒の取り組み状況のデータを次のように活用した。まず、7月の模擬試験に向けて、英語コミュニケーションの授業の冒頭10分間で「単元定着トレーニング」に取り組みませ、さらに模擬試験当日まで「生徒自主学習機能」の課題に自主的に取り組むよう、生徒に声をかけた。

「模擬試験の後に『生徒自主学習機能』の取り組み状況を分析したところ、予想通り、授業外では一部の生徒しか取り組んでいませんでしたが、自主的に課題に取り組んだ生徒は模擬試験で好成績を収めていました。そうした『自

図1 配信課題の取り組み状況のデータを活用した 生徒の自走力の可視化・育成

1年次7月の模擬試験に向けて

- 模擬試験3週間前から、Classiの「学習トレーニング」での課題の配信を開始。取り組むかどうかは生徒の自由とした。

強制ではないよ。自分で判断して取り組もう！



- 模擬試験終了後、「学習トレーニング」の取り組み状況と模擬試験の結果を生徒にフィードバックした。

配信した課題に取り組んだ人は、
よい成績だったようだね！

でも、自主的に取り組んだ人は少なかったね。
このままで大丈夫かな？

1年次11月の模擬試験に向けて

- 模擬試験6週間前から、「学習トレーニング」で課題の配信を開始。前回同様、取り組むかどうかは生徒の自由とした。

7月の模擬試験のことを思い出して、
取り組むかどうかを決めよう



- 模擬試験終了後、「学習トレーニング」の取り組み状況と模擬試験の結果を生徒にフィードバックした。

配信した課題に取り組んだ人が増えたよ！

模擬試験が終わった後も取り組む人が多いね。
君たちは自走力が高まったね！

配信した課題への取り組み状況からさらに分かったこと

- Aゾーン、Cゾーンの生徒の大半が、期限前に余裕を持って課題を終えていたけれど、Bゾーンの生徒の中には締め切りギリギリに終える生徒も……。Bゾーンの生徒は油断しているのかも？
- Bゾーンの生徒には油断しないようにしよう！声かけをしよう！努力しているCゾーンの生徒には、今の調子で学習を続けるよう、声かけをしよう！

「おすすめ演習」として配信された課題に、生徒一人ひとりがどのように取り組んだのかを見ていくことで、生徒の成長、そして今後の変化が見えてきた。教師に求められるのは、そうした成長や変化を踏まえた声かけだ。

*取材した内容を基に編集部で作成。

走」と好成绩の相関をデータで示した上で、『必要な学習に自ら取り組む自走力は、3年生になつて慌てて身につけられるものではない』と話し、学習習慣の定着を促しました（桑野先生）

11月の模擬試験の前には、7月の模擬試験の結果から判明したGTZ（*3）を基に、生徒をA〜Cの3ゾーンに分けて、今回の模擬試験では1つ上のゾーンを目指すよう、目標を設定。その上で前回同様、授業の冒頭で「単元定着トレーニング」に取り組ませ、終わらなかつた問題や「おすすめ演習」

には授業外で自主的に取り組むよう、声かけを行った。

「11月の模擬試験での目標設定が功を奏し、授業外学習に取り組む生徒が一気に増えました。さらに取り組み状況を追跡すると、試験終了後も多くの生徒が授業外学習を続けていることが確認でき、さらなる自走を促すため、そのデータも生徒に示したり、教師間で共有したりしています」（桑野先生）

配信した課題への取り組み状況からは、興味深い事実が読み取れた。AゾーンとCゾーンの生徒は、授業内で配信

された課題のやり残しに早々に取り組む傾向があったのに対し、Bゾーンの生徒は、期限間際になつて解き終わる傾向が見られた。

「Cゾーンの生徒は、自己マネジメント力を発揮して課題に取り組んでいましたので、仮に結果がいま一つでも、努力を評価する声かけを行う必要がありました。一方、Bゾーンの生徒の中には、油断している者もいたので、学習意欲を高める声かけが必要でした。データが、声かけの必要性がある生徒を明示してくれたのです」（桑野先生）

*3 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。

情報・データを
活用し、
生徒との時間を
デザインする

理解度を瞬時に把握し、
生徒に合った授業を設計

授業内学習で思考力を育む時間を増やすため、三好先生は生徒の正誤データを活用している。大学入学共通テストの過去問題などを生徒に「Microsoft Forms」で解答させて、正答率が低かった問題をその場で把握して解説する「誤答分析」を行っている。

「解答結果を踏まえて誤答に焦点をあてる授業での生徒の集中力は、格段に高いです。生徒にとっては、自分たちの理解度を把握した上で展開される、言わばエビデンスに基づく授業だからでしょう。授業後の質問も増えました」（三好先生）

生徒の理解が十分で、詳細な説明が不要な問題が明らかになることで、授

業に時間的な余裕も生まれていると三好先生は説明する。

「時間的な余裕ができた分、解答が割れた問題について、それぞれの解の理由を議論させるなど、概念的知識の理解に時間を割くことができるようになりました。さらに、余った時間を使って、私が出会った魅力的な社会人を紹介し、『この人は、壁にぶちあたった時にどう行動するだろう』『この人の自走力は、どこで発揮されているだろうか』などと、生徒に問いかける機会も増えました。情報・データを収集することで、生徒の状況を把握することはできませんが、生徒の心を動かせるのは、教師個人の視野や視点から生まれる言葉だと思っています」

生成AIの力を生かして、
生徒との対話を増やす

桑野先生は、生徒が作成した志望理由書や小論文などを、生成AIを活用して吟味・添削し、生徒にフィードバックしている（図2）。

「生成AIが添削した文章は冗長だったり、裏づけのデータが古かったりして、そのままでは使えないこともあります。具体的な指示を添え、やり直しを求めれば、すぐに改訂案が出

てきます。そうして生成AIと繰り返し文章を生徒に返却しています」

複数の教師で何日もかけてチェックしなくても、客観性の高いフィードバックが短時間で可能になった分、生成AIの添削を間においた生徒との対話に時間をかけているという。

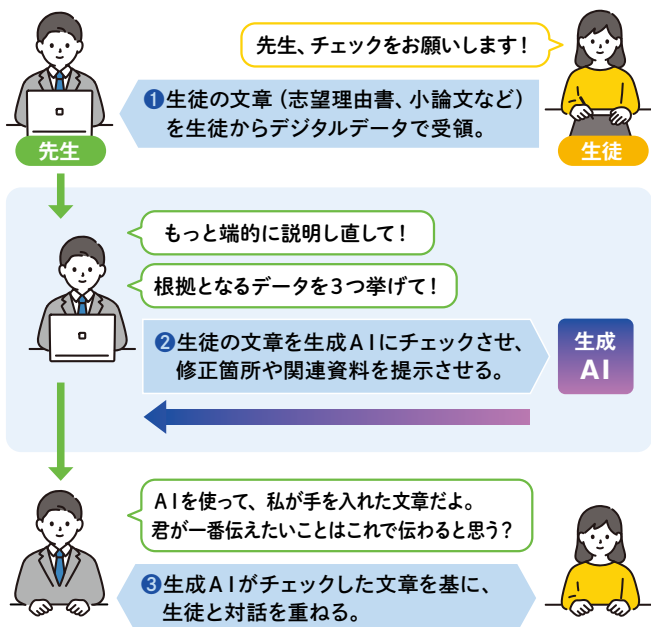
「生成AIはよくも悪くも客観的です。だからこそ、生成AIが作成した文章をそのまま受け入れるのではなく、根拠となるデータが正しいものであるかどうかを確認し、自分が伝えたいことがしっかりと盛り込まれているか、

教師との対話を通して生徒自身に検証させることが大切です」（三好先生）

また、生成AIにどのように向き合えばよいか、日々の授業を通して生徒に考えさせている。

「答えが1つしかない知識問題は検索すればよいけれど、『あなたはどうか考える？』といった問いでは、ネット検索や生成AIの回答は参考にしかないことを生徒は理解しています。それは、授業やパフォーマンステストで思考力を求める問いを与えてきた成果だと捉えています」（桑野先生）

図2 生成AIを活用した添削で、
生徒との対話の時間を増やす



生成AIの活用でチェックが効率化した分、生徒とのやり取りに時間をかけられるようになった。生成AIと教師が添削・校正した文章を見た生徒のほとんどが、「自分はここを強調したい」と、さらに文章を練り上げようとしたという。

*取材した内容を基に編集部で作成。